渡辺　清

戦艦武蔵の最期

朝日新聞社

渡辺　清
（わたなべ・きよし）

1925年静岡県に生まれる。1941年高小卒後海軍に志願，1942年戦艦武蔵に乗組む。マリアナ，レイテ沖海戦に参加，武蔵撃沈のさい遭難し奇蹟的に生還。1945年復員。現在，日本戦没学生記念会常任理事。思想の科学研究会員。著書『海の城—海軍少年兵の手記』その他。

戦艦武蔵の最後
定　価　600 円
発行日　昭和46年10月10日　第1刷
　　昭和46年11月15日　第2刷
著　者　渡辺　清
発行者　角田秀雄
印刷所　明善印刷
発行所　東京　名古屋　大阪　北九州　朝日新聞社
© Kiyoshi Watanabe 1971
0095-253930-0042

この一篇を、
北緯一二度五〇分、東経一二二度三五分、
水深一三〇〇メートルの
海底に眠る戦艦武蔵の戦友にささげる。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

(一)

裾に赤土の地肌を見せた岬の鼻が、両側から突堤のように外海をさえぎっていた。西方に口をひらいて、湾内は単調な曲線を描いていたが、そのわりにふところは深かった。背後には、熱帯樹におおわれた傾斜のゆるやかな山容がせまり、乱雑に枝を広げたその緑の稜線の向うに、町の白い屋根が点々と見えた。ボルネオ島の北西、ブルネイ湾である。

戦艦の武蔵は、その湾の左端に戦隊旗艦の大和と艦首を並べていた。二日前、僚艦とともにリンガ泊地を出て、昨日昼すぎここに入ったのである。「捷一号作戦」が発動されてちょうど五日目だった。艦隊はここで燃料を補給し、最後の出撃準備をととのえることになっていた。

そこで武蔵でも、さっそく投錨と同時にその準備にとりかかった。出撃はあす早朝に迫っているので、準備も急がなければならない。作業はあとからあとからおれたちを追いかけた。

まず入港と同時にはじまったのが、「外舷塗り方」だ。観艦式に出るのではあるまいし、これから出撃というのに、ペンキ塗りでもないもんだと思ったが、これも命令だから仕方がない。おれたち両舷直は、さっそく総がかりで、艦首から艦尾まで、両舷をくまなく塗りあげた。おかげで武蔵は、濃いネズミ色のてらてらした光沢をおび、ところどころ赤錆のうき出ていた乾舷（水線から上の舷側）も見ちがえるほど綺麗になった。まるで進水直後のように……。

これを見て、あとで下士官たちが、「これじゃかえって敵さんの目について狙われやすいぞ。」とぶつぶつこぼしていたが、これもおそらく、どうせ出撃まえ可燃物として処分することになっているペンキだから、そんならいっそ塗ってしまったほうが片付いていいぐらいに、副長か甲板士官あたりが気をまわして思いついたことかも知れない。

それがすむとおれたちは、こんどは艦内の可燃物の処理をはじめた。艦内には、ペンキのほかにも燃えやすいものはかなりある。短艇庫の内火艇（ランチ）やカッター、それに各部の甲板天幕、食卓、乗員の衣嚢、寝台、釣床などだが、釣床は戦闘配置の防弾用（マンドレッド）に若干のこして、あとは全部、分隊ごとに水線下に格納し、ランチとカッターのほうも、救助艇として、それぞれ二隻あて残しただけで、あとはすべて島の基地におろしてしまった。ついでにこれも火災になった場合を考慮して、上甲板の通路のリノリウムも、のこらずひっぺがした。リノリウムは、さくら色の接着剤で床の鉄板にかたくくっついているので、それを一枚々々はがしていくのはずいぶん骨が折れた。結局これだけでも、

日没頃からはじめて巡検まぎわまでかかってしまった。

それから、今朝になってから戦闘配置の兵器整備だ。もっともこのほうは、すでにリンガ泊地で十分整備してあったので、別にあわてることもなかったが、それでもいざ出撃となると、念には念を入れなくてはならなかった。

そこでおれたちは、朝食後から配置につきっきりで、いつもよりずっとていねいに銃身の分解掃除をしたり、膅中（砲身の中）を洗滌したり、撃針や発条も新しいのと取りかえたり、機動部には、グリスや油をさしたりして、配置の総点検をおこなった。むろん、戦闘になってからまごつかないように予備弾倉も規定通り用意し、まわりの防弾用の砂嚢も、あらたにしっかりと積みかえた。そしてそれがいまようやく終ったところだ。

おれは、みんながデッキ（居住区）へ引揚げてから、念のためにもう一度銃を試動してみて、引金や開閉桿の調子などをたしかめてから、銃架をもとの位置に固定した。俯仰も旋回も照準器の具合も上々だ。弾室と弾倉の嚙み合せもうまくいっている。もうこれでいい。射撃は順調にやれるだろう。とにかくこれで戦闘準備はすんだ。あとはただあすの出撃を待つばかりだ。

まもなく「課業止め」のラッパが鳴った。正午だ。太陽はむきみのまま、うるんだように中天にころがっている。暑い。おれは顔の汗をぬぐいながら、手摺りのところまで歩いていって、ひとわたり湾内を眺めてみた。湾内には、二日前から集結してきた各艦が、思い思いの方向に艦首をむけ

て投錨していた。

第二艦隊旗艦の重巡愛宕をとりまくようにして、湾の右手には、戦艦の長門、金剛、榛名が檣楼をつらねて並んでいる。榛名はいま右舷に油槽船（タンカー）を横づけて、重油搭載の最中だ。白いいんかん服（掃除服）を着た機関兵たちが、甲板を忙しそうにとび廻っている。そこから左へ少し離れた岬の手前には、重巡の摩耶、高雄、利根、筑摩、戦艦の山城、扶桑の姿も見える。せまい湾口からはみ出たように、艦首を沖にむけて並んでいるのは、能代を旗艦とする第二水雷戦隊と、第十戦隊の駆逐艦だ。ラバウル水域に作戦中で、本隊より一日入港の遅れていた重巡最上を旗艦とする満潮、朝雲、山雲の第四駆逐隊も二時間前に到着したので、これで第二艦隊は全部集結したわけである。――そしてあすはこの全艦艇が、第一遊撃部隊としてレイテに出撃していくのだ。

「捷一号作戦」はすでに五日前、連合艦隊司令長官から発令されていた。「捷一号作戦」というのは、大本営がことし（昭和十九年）の七月にたてた防衛計画で、これには第一号から第四号まであった。第一は比島方面（フィリピン）、第二は台湾及び南西諸島、第三は日本本土、第四は北海道及び千島の北方方面、というふうに防衛線をあらかじめ四つの地域に分けて敵の進攻作戦にそなえ、なかでも特に比島方面を優先的に重視したものであったが、それからわずか二ヵ月後の九月に入って、敵は予想通り、その攻撃のホコ先を比島に向けてきたのである。

九月九日のダバオ地区の奇襲を皮切りに、敵はセブ、マクタン、マニラ方面に連日空襲を加えた

が、これはあきらかに、敵の比島上陸作戦の前哨戦であった。空襲は二十四日まで断続的に行なわれたが、このときの空襲で、マニラ湾の在泊艦船と、その周辺の味方の飛行基地は、ほとんど潰滅にちかい被害をうけた。そしてさらに十月に入ると、敵はこんどは台湾、沖縄方面に大規模な空襲を仕掛けてきた。敵は台湾東南方に、空母を基幹とする機動部隊をくり出して、十月十日から四日間にわたって、延二千機にのぼる艦載機の波状攻撃をくわえた。比島上陸作戦を成功させるためには、どうしてもその周辺と後方基地を根こそぎに叩いておく必要があったからである。

むろんこれに対して味方も、その航空兵力の全勢力をあげて反撃に出たが、基地からの飛翔距離も遠く、搭乗員の錬度も低かったうえに、天候の不良という悪条件が重なって、ほとんどこれという戦果をあげることができなかった。そればかりでなく、味方はいたるところで致命的な被害をうけ、最初からこの攻撃の主力であった第二航空艦隊のごときは、出撃わずか三日にして、その兵力の大半を失なってしまった。「台湾沖航空戦」といわれたのがこれである。

そして、この台湾沖航空戦から二日後の十七日朝になって、敵はついにレイテ湾口のスルアン島に上陸を開始したのだ。つづいてその翌日には、ディガレット沿岸監視哨からレイテ東方海面に、戦艦・空母を含む輸送船、上陸用舟艇など、数百隻にのぼる敵の機動部隊が集結して、終日タクロバンに艦砲射撃をくわえ、翌正午頃から同地区に大部隊がぞくぞくと上陸を開始したことが報告された。

一方これに呼応して、台湾沖に遊弋中だった艦隊と、ホーランディア方面に待機していた別の有力な敵の機動部隊も、レイテにむけて急航中であるという情報も入った。比島方面の戦局は、これによってにわかに緊迫化した。

比島は、味方にとって重要な戦略地点であった。比島が敵の手に落ちれば、南方の資源を断たれたうえ、本土の防衛線はたちどころに崩れ、日本は遅かれ早かれ敗北するだろう。それでなくても、一昨年のミッドウェー海戦以来、味方は押されどうしに押されてきている。すでにマキン、タラワ、アッツ島は玉砕し、ガダルカナル、クェゼリン島は占領され、そしてこの六月のマリアナ海戦では、敵に作戦の裏をかかれて、連合艦隊は大鳳以下空母三隻を失なって惨敗した。東条内閣崩壊の直接の機縁となったサイパン島も、すでに四カ月前に玉砕している。

こうして味方は、ここ一年足らずのうちに後退に後退を重ね、その防衛圏も、いまは本土近海の列島線まで追いつめられてしまった。戦局は日増しに険悪の度をくわえながら、末期的兆候を呈している。作戦もだんだん苦しくなる。だからここでなんとしても敵の進攻を喰いとめて、戦局をすこしでも有利に挽回しなければならない、というのが、「捷一号作戦」に賭けた連合艦隊の作戦計画であった。

おれは、昨夜巡検後の煙草盆（喫煙所）で、通信科の同年兵から聞いたこれらの情報を思い出しながら、あらためて、来るべきものがきたと思った。この半年ばかり、ある不吉な予感に脅えながら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

遠からず敵とぶつかり合う修羅場の時がくるだろうと覚悟はしていたが、とうとうその時がやってきたと思った。むろんこんどの作戦がどのような形で展開されるか、またどのような顛末をたどるか、下級兵のおれにはまるで見当がつかないが、とにかくこれで自分の投げこまれた状況のあとさきがはっきりした。宙ぶらりんで、あいまいだった待機の状態に、一つのはっきりした目標があたえられたのである。

レイテ。おれは、ぬるっと舌先を滑るようなその未知の地名をもういちど口の中で呟いてみた。レイテ……。こんな地名は、学校の地理でも習わなかったし、第一、この地球上にそんな場所があったことも、今のいままでおれは知らなかった。戦争でもなければ、おそらく生涯知らずに過した地名だろう。それがいま突然闇の底から起ちあがったように、大きく眼の前にのしかかってきたのをおれは感じた。

そしてあすはそこに向って出ていかなくてはならない。艦とともに、そこに踏みこんでいかなくてはならない。それにしても、こんどはおれも死を覚悟しなくてはならないだろう。これまでのように死線をくぐりぬけることは難かしいかもしれない。……だがおれは、いまは先のことはあまり考えたくなかった。考えてみたところで、どうなるというわけでもない。その時はその時だ。行くところまで行けば、すべてははっきりすることだった。

（二）

昼食がすんでしばらくすると、高声令達器が艦内に号令を伝えた。

「総員集合、前甲板。」

その号令を聞いただけで、集合の目的のなんであるか、おれたちにもぴんときた。

「総員集合、前甲板。」

これが普通の場合なら、いまどき何だろうと、互いに頭をかしげるところだが、総員集合の目的はもうわかっている。出撃を前に艦長の最後の訓示だ。

おれたちは急いでデッキを出て露天甲板に駈けあがった。みるとあっちの昇降口（ハッチ）からもこっちの昇降口からも、草色の作業服がぞろぞろとラッタル（鉄はしご）を駈けあがってくる。今日ばかりは、悠長に歩いているものは一人もいない。みんな両手を腰にあてて正規の駈け足だ。

前甲板の号令台には、すでに当直将校と甲板士官の二人が立って、整列の指示を与えている。おれたちはその指示にしたがって、艦首にむかって左舷から分隊番号順に整列する。士官たちは右舷の前甲板の正面に二列横隊で並んだ。いままでの集合とは、まるで質のちがった固い不透明な空気が、おれたちの首筋にねばりつくように上からかぶさってくる。

当直将校は、さっそく各分隊の分隊士から点呼をとって、号令台をおりた。これで総員二千四百人が揃ったのである。出撃を前に最後の総員集合だ。

やがて副長の加藤大佐に先導されて、艦長の猪口（敏平）少将が前甲板に姿をみせた。おれたちは不動の姿勢をとって、号令台の上に艦長を迎えた。

猪口艦長は、この八月着任したばかりで、武蔵にとっては四代目の艦長だった。着任してきたときは大佐だったが、まもなく少将に進級した。戦艦級の艦長の中では、最先任の一人である。

着任してまだ二カ月かそこらで、乗員との馴染みもうすいが、おれはこの艦長には、以前から見覚えがあった。というのは、おれが三年前、砲術学校の普通科練習生だったときに、ちょうどそこの教頭をしていたからである。勾配のある広い額、一重瞼の黒い大きな眼、鼻翼のしまった真っ直ぐな鼻、内がわにめくれ加減の肉の厚い唇、その長い顔には、不釣合いなとがった下顎など、みたところ感じはあの頃とすこしも変っていない。年は四十九、痩型のすらりとした長身で、風采も立派だが、声のいいのも特徴だ。号令を下すには、もってこいの張りのある澄んだいい声をもっている。砲術学校でも、よく毎朝の「課業始め」には号令台に上がって号令をかけたが、その声は広い校庭いっぱいに朗々と響きわたり、ときには風の具合で、入江をこえて対岸の射的場のほうまで届いたものだ。

といっても、艦長にはかさにかかったような武張ったところは少しもなかった。どちらかといえ

ば飄々として、屈託のない小ざっぱりとした印象をあたえた。事実、勤務や訓練については厳しかったが、ふだんは口数が少なく温厚で、ことごとしい素振りはめったに見せなかった。もっともこういうところは、多分に長い間の禅の修行からきたものかもしれなかった。

艦長は、禅にかなり造詣が深かったようで、リンガ泊地でも、何度かおれたちを前甲板に集めて座禅をくませたものだ。ときには、「今夜はいい月だから、わしが一つみんなにいい話を聞かせてやろう。まあ坐ったまま、固くならずに月でも眺めながら、耳だけこっちへ向けておいてほしい。」といいながら、「人間というものは上をみればきりがない。下をみてもきりがない。だからそういうきりのないことにくよくよしてはいけない。それは自分で自分を卑しめることになる。大事なことは、何事も有難いという感謝の気持をもって、それぞれの分に応じて力をつくしていくことだ。そうすればそこに、自然に愛と悟りが生まれ、人生をゆったりと楽しく生きることができる……。」というような、抹香くさい話を聞かせたりした。

しかもその話し方も、いかにも朴訥で、ものやわらかで、ちょっと軍人ばなれしているので、これが日本海軍きっての射撃学の大家だとは、とても思えなかったが、とにかく艦長は、こと砲術にかけてはたいへんな権威で、およそ部内の射撃指揮官で、直接彼の指導を受けなかったものはないとさえいわれている。その名も海軍部内ばかりでなく、敵国のアメリカにさえ「大砲のイノクチ」として知られているという話だった。それだけに、四十六サンチの主砲を搭載した武蔵にとって、

彼はもっともふさわしい艦長だったかもしれない。

艦長は号令台に立ったまま、ちょっとの間手帳に眼を通していたが、やがてそれを上衣のポケットに押しこむと、まず並んでいるおれたち乗員の顔を、はしからはしまでひとわたりゆっくりと見廻した。それから、いつもの澄んだ気持のいい声で、いよいよ明朝レイテに出撃することになったことを伝え、その出撃進路と、現在の敵の勢力、状況などをわかりやすくかいつまんで説明していったが、ときおり幅のせまいその眉間のあたりが変にひきつれて、何か難かしい問題を解こうとしているような表情が浮んだ。

これはきのう聞いた噂だが、なんでも猪口艦長は、こんどの作戦には最初から反対だったらしい。連合艦隊司令部では、「捷一号作戦」の目的を、敵輸送船団の撃滅におき、艦隊決戦は二の次に考えていたが、いくら輸送船団を撃砕しても、それを援護する機動部隊が健在であるかぎり、敵は何回でも上陸を繰返すことができる。それに一隻の空母も持たない第二艦隊が、裸でレイテ湾内に突入したところで、もしその背後を、蝟集する敵の機動部隊に衝かれたら、艦隊はそれこそ出口を失なって潰滅するだろう。だからここで無謀な突入作戦は中止して、どこまでも艦隊の洋上決戦に持ちこんで、一挙に制海権を獲得しなければならない。それが海上兵法の原則である。というのが艦長の主張だった。

むろんこの主張は、猪口艦長だけでなく、他にも何人か同様な意見を具申した指揮官もいたよう

だが、いずれも連合艦隊司令長官によってあっさり否認された。長官としては、もともと無理な作戦であることは承知の上で、もはやこの機会をのがしては、艦隊による組織的な洋上作戦は不可能であると判断したのである。「捷一号作戦」が死中に活を求めた「特攻作戦」とか、勝敗を運にまかせた「殴りこみ作戦」といわれているのもそのためであった。

艦長は、しかし作戦上のことについてはひと言も触れなかった。すでに作戦は発令されているのだ。今さら作戦計画を変更するわけにはいかない。一艦の指揮官としては、たとえその作戦が不本意なものであっても、いったん連合艦隊司令部命令として発令された以上、その統帥にどこまでも服さなければならなかったのである。

艦長は、最後に一語々々吟味するような調子でゆっくりと、

「さっきも言ったように、今度の作戦は、敵と互角に渡りあえるような楽な戦さではない。その数からいっても、敵はわれわれに数倍しておるし、恐らく飛行機も相当量投入しておるだろう。肝心の制海権も制空権も、ほとんど敵の手中にある。そしてわれわれは明日そこへ乗りこんでいくのだ。しかしそれを怖れてはいかん。この作戦は文字どおり、祖国の興亡と連合艦隊の運命を賭けた伸るか反るかの最後の決戦であることを忘れてはいかん。とにかく勝たねばならん戦さだ。もちろんこんどは本艦も、相当の被害を覚悟せにゃならんだろうが、諺にもあるように、敢然と死をもって進めばおのずと道が開けるということもある。……われわれはリンガ泊地で十分訓練を重ねてきたが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com